

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。また、「アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員寄稿記事.....	4
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	16
➤ 会議・イベント案内.....	17
➤ 会員募集中.....	18

## JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

### JRRN 後援「遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013」が 2013 年 7 月 27 日(土)に開催されました

JRRN 後援『遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013』が、2013 年 7 月 27 日(土) 午後に福岡県遠賀郡水巻町にて地元有志の力を結集して開催され、200 名を超える参加者ととも、地域に愛される遠賀堀川の未来について語り合いました。

『遠賀堀川の歴史と変遷』と題した基調講演から始まり、主催団体による『遠賀堀川再生への取り組みと夢』、遠賀堀川再生に向けた二つの学生提案、更に河川環境の流量及び風景に関わる二つの講演が行われました。また、約 1 時間のパネルディスカッションでは、『遠賀堀川の未来を語る』をテーマに、講演講師をパネラーにフロアを交えた活発な議論が展開されました。

本行事は、地域の産官学民が連携した遠賀堀川再生に向けた新たな取組みのキックオフを目的に開催され、企画・運営メンバーには JRRN 会員も多く含まれます。遠賀堀川再生を目指した今後の様々な活動の展開に期待するとともに、JRRN も本活動への応援を通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与して参ります。

なお、本行事の講演資料や講演録、また関連動画などは、後日、主催・共催団体の協力を得て、JRRN ホームページを通じて皆様にご紹介させていただきます。

※本行事は、北九州市の遠賀川環境保全活動団体支援助成を受けて開催されました。

■遠賀堀川の歴史紹介動画（シンポジウムオープニングで放映）は以下よりご覧頂けます。 ※約 2 分  
<http://youtu.be/EwPAU5QoBaU> 「制作：筑波大学白川（直）研究室 坂本貴啓・鴨志田穂高」

【プログラム】		
13:00	開会・挨拶	
13:10	基調講演『遠賀堀川の歴史と変遷』	元遠賀川河川事務所長 松木 洋忠
13:50	活動報告『遠賀堀川再生への取り組みと夢』	堀川再生の会・五平太 会長 中村 恭子
14:10	学生提案『フットパスによる遠賀堀川周辺の地域活性化』	北九州市立大学廣川研究室 坂本裕基
14:25	学生提案『遠賀堀川の個性を活かした水辺空間』	筑波大学白川(直)研究室 坂本貴啓, 田中聡大, 鴨志田穂高, 能登江梨香, 中前千佳, 小口春菜
14:55	休憩	
15:00	講演『河川環境と流量』	筑波大学 准教授 白川 直樹
15:25	講演『河川環境と景観構築』	九州大学 教授 島谷 幸宏
15:55	休憩	
16:00	パネルディスカッション『遠賀堀川の未来を語る』	
	パネリスト	元遠賀川河川事務所長 松木 洋忠 堀川再生の会・五平太 会長 中村 恭子 筑波大学 准教授 白川 直樹 九州大学 教授 島谷 幸宏
	コーディネーター	北九州市立大学 教授 内田 晃
17:00	閉会	



オープニング



主催者挨拶 (堀川再生の会・五平太 中村会長)



基調講演 (元遠賀川河川事務所長 松木洋忠)



学生提案 (筑波大学白川(直)研究室)



パネルディスカッション



閉会式 (演奏: 北九州市立大学 坂本裕基)



川ひらたの展示



遠賀堀川の歴史と文化財展示

(JRRN 事務局・和田彰)

「河川再生に関わるモニタリング活動アンケート調査」協力団体の募集

JRRN では、河川再生に関わるモニタリング活動の更なる推進に向け、「PRAGMO—河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き」日本語版を昨年 11 月に発行しました。

本年は、日本国内における河川再生に関わるモニタリング活動の現状や課題を共有するため、河川環境改善に取り組む市民団体の皆様へモニタリング活動に関わるアンケート調査を実施させて頂き、「河川再生に関わるモニタリング活動事例集（仮題）」を作成し全国に普及していきたいと考えております。

そこで、本アンケート調査にご協力頂ける市民団体を募集致します。アンケートにご協力頂ける場合は、JRRN 事務局([info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net))までご連絡下さい。改めて事務局よりご返信を差し上げ、アンケート用紙等の関連資料一式を郵送させて頂きます。

(アンケート回答〆切：8月18日)

なお、アンケート調査にご協力頂きました皆様には、上記のモニタリング活動事例集（本年 12 月発行予定）を謹呈致します。皆様からのご応募をお待ち申し上げます。

※本企画は、公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施するものです。



JRRN 法人河川財団ネットワークによるアユのモニタリング調査を兼ねたイベント開催の様子 (JRRN 事務局は、2012 年 11 月より河川環境の再生・改善のために公益財団法人 PRAGMO を発足し、河川環境の再生・改善に取り組んでいます)



日本河川・流域再生ネットワーク企画

河川再生に関わるモニタリング活動調査

アンケート協力団体募集

(平成 25 年 8 月 18 日アンケート回答〆切)

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)では、河川再生に関わるモニタリング活動の現状や課題を共有するため、日頃から河川環境改善に取り組む市民団体の皆様へモニタリング活動に関わるアンケート調査を実施させて頂き、「河川再生に関わるモニタリング活動事例集（仮題）」を作成し全国に普及していきたいと考えております。

そこで、本アンケート調査にご協力頂ける団体を募集致します。「アンケート趣旨説明及び内容」を以下よりご覧の上、アンケート調査にご協力頂ける場合は、JRRN 事務局までお申込み頂ければ幸いです。改めて事務局よりご連絡を差し上げ、アンケート用紙等の関連資料一式を郵送させて頂きます。

なお、アンケート調査にご協力頂きました皆様には、「河川再生に関わるモニタリング活動事例集（仮題）」(平成 25 年 12 月発行予定)を謹呈致します。

■趣旨説明・内容(PDF413KB) : <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/files/2013/07/H25JRRNsurveyQ.pdf>

■回答サンプル(PDF232KB) : <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/files/2013/07/H25JRRNsurveyA.pdf>

申込み・お問い合わせ

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局 担当： 後藤勝洋・和田彰  
〒104-0033 東京都中央区新川 1-17-24 新川中央ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所内  
Tel: 03-6228-3862 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net)

2013 年 7 月 25 日 日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局

※本企画は、公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施するものです。

～アンケート調査では次の様なモニタリング活動を対象としています～

次の 3 つのすべて、もしくはいずれかに当てはまる河川における各種調査を対象としています。

- ① (目的) 河川環境の再生・保全の変化や効果を把握する (=評価する) ための調査
- ② (対象) 河川環境の再生・保全に向け、明確な測定対象 (ターゲット) を有している調査
- ③ (継続) 継続的に実施している調査

(例) 水質調査、川の形状変化の観測、アユの遡上調査、外来種の繁茂状況調査、地域固有種の生息調査 etc.

関連資料の入手はこちら

■趣旨説明・アンケート内容(PDF413KB) :

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/files/2013/07/H25JRRNsurveyQ.pdf>

■回答サンプル(PDF232KB) :

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/files/2013/07/H25JRRNsurveyA.pdf>

申込み・お問い合わせ

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局 担当： 後藤勝洋・和田彰  
〒104-0033 東京都中央区新川 1-17-24 新川中央ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所内  
Tel: 03-6228-3862 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net)

(JRRN 事務局・和田彰)

## 奥多摩の演習林で「森と水」の関連性を知る

寄稿者：前川太一郎（フリーライター・編集者・JRRN 会員）

### ■「使いながら守る水循環」を現地で学ぶ

1999 年 1 月、「水」をテーマとした社会貢献活動として設立された「ミツカン水の文化センター」は、機関誌『水の文化』の発行やさまざまな研究・情報交流活動を通じて、水に対する意識の向上および人と水の新たな関係性を提案しています。

その活動の 1 つが、今回ご紹介する「使いながら守る水循環」を学ぶワークショップ「里川文化塾」です。一般市民を対象に年間 6 回ほど開催しており、これまで神奈川県川崎市の二ヶ領用水や千葉県浦安市の液状化に伴う上下水道の現状などを学びました。

12 回目となる今回のテーマは「演習林で学ぶ〈森と水〉」です。東京農業大学の協力を得て、2013 年 5 月 11 日に同大学の奥多摩演習林で開催しました。東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科教授で奥多摩演習林長の菅原泉先生をナビゲーターに、森林蓄積量の簡易測定、間伐作業、土壌の断面観察、作業道の見学、シカ食害の現場観察などのフィールドワークを重ねたあと、研修センターで菅原先生のレクチャーを受けました。つまり、実際に行われている森林保全の研究および作業の一端を体験し、「森と水の関係性」について学んだのです。



### ■演習林で間伐作業を体験

「緑のダム」と呼ばれる森には、水を育む働きがあります。飲み水に不自由しないのも、大雨や台風で洪水が発生しないのも、森林の機能が健やかに保たれているおかげです。しかし、人による手入れも必要です。

東京農業大学奥多摩演習林（以下、演習林）は秩父多摩甲斐国立公園に位置する都内唯一の大学演習林です。面積は約 156 ha。東京ドーム 30 個分以上ですが、山地なので斜面も考慮に入れると、その 1.5 倍ほどの

広さになります。1978 年、東京農業大学林学科（現・森林総合科学科）創設 30 周年記念として東京都奥多摩町の私有地を購入したものだそうです。

参加者は JR 青梅線の終点、奥多摩駅で集合。マイクロバスで 20 分ほどのところにある演習林の研修センターに向かいます。ミツカン水の文化センターの後藤喜晃センター長の挨拶のあと、菅原先生から演習林の概要説明がありました。パラパラと雨が降り始める中、雨合羽を着て、ヘルメットをかぶり、鋸や鉋を腰につけてフィールドワークに出発しました。



身支度して演習林の作業道を歩き出す参加者たち

なだらかな斜面の林地で最初のフィールドワークは間伐のための調査です。間伐とは、木を間引く作業。木がすくすく成長し、下草が生える健全な森林に保つため、また利用できる大きさに達した立木を収穫するために行われます。

間伐するためには、その森林がどのくらい混み合っているか、密度を調べる必要があります。1 ha あたりの森林の蓄積量を算出し、間伐する本数を割り出すための簡易な方法が「おみとおし」です。使う道具は、林地の傾斜角度の測定目安が記されたカードに 50cm のひもが付いたもの。これを目線にかざし、360 度見回して立木を数え、カード裏の表に照らし合わせて、全体の何割を間引けばいいのかという間伐率と、間伐する本数を割り出します。菅原先生に使い方の手順を細かく教わりながら、それぞれ実際に「おみとおし」を試してみました。

いよいよ木を切り倒します。菅原先生が伐倒の手順を解説しました。「最初に安全確認。落下しそうな枯れ枝がないかなどを確認して、倒しやすい方向を決めます。枝ぶりを見て、重心のかかっている方向に倒すん



菅原先生(右端)に教わりながら「おみとおし」を使う

ですね。倒す方向に〈受け口〉をつくり、逆側に〈追い口〉をつくって切り倒します」

受け口の深さは根元の直径の4分の1以上(大径木の場合は3分の1以上)。下を水平に切り込み、次に斜めから切り込んで、30度~45度の角度に幹をえぐります。追い口は、受け口の高さの下から3分の2程度の位置を水平に切り込みます。「こういうふうにはづいて、へその位置で引くんです」と菅原先生にコツを教してもらいながら、ノコギリを引きました。

伐倒したヒノキをノコギリで輪切りにし、コースターをつくりました。参加者のおみやげです。



伐倒したヒノキをノコギリで切ってコースターをつくる

### ■ 険しい山の中で土壌と食害を見る

午後は森の中を登り、水を育む働きをする「土」の調査です。「A層」と呼ばれる表層土が厚ければ厚いほど、栄養分が多くなります。土が堆積しやすい谷地形のところほど表層土が厚く、雨水もたまりやすく、木は大きく育つわけです。

各々小ぶりのシャベルで作業道の側壁を削り、断面を露出させ、土の色の彩度と明度の変化を表にした「土色帳」と照らし合わせて色を調べました。黒味が濃ければ濃いほど有機物の含有量が高い、つまり栄養価の高い表層土ということになります。

「適地適木」という言葉を菅原先生は教えてくれました。「適材適所」の林業バージョンです。尾根にはマツ、中腹にヒノキ、谷部にはスギ。そうやってこまめに植え分けする必要があります。たとえばヒノキは、ある程度乾いている土のほうが、生長がよくなるそうです。

持ちこたえていた曇り空から、小雨が落ちてきました。作業道から急峻な山道へと入ります。雨合羽のフードをかぶり、本格的な山登りです。先頭を切る菅原先生は足取りも軽く、さすがに慣れたもの。参加者たちは息を切らし、汗だくで後へ続きます。ついに「もう少しペース落としてくださ〜い」の音が……。



上部が「A層」と呼ばれる土壌。下にいくほど茶色がかった土壌が見える



息を切らしながら急な斜面を登る

尾根を越え、山を下りながら、菅原先生はシカによる食害の現状と対策について説明しました。若芽の好きなシカが下草を食いつくしてしまうと、土壌が露出し大雨で流出しやすくなります。分解者である微生物も育ちません。いい土ができなくなり、水を育む森の力が損なわれてしまうのです。菅原先生は言いました。

「シカはトリカブトも食います。キハダも食うようになりました。露出している根っこをかじるんです。シカは四つの胃袋で反芻します。今はハシリドコロという毒のある草は食いませんが、いつか勇気のあるシカが口にして『うまい』と思ったらどうでしょう。世代交代を繰り返すうちに、ハシリドコロの毒素を分解する酵素を胃液から分泌するシカが出るかもしれない。アセビは最もシカが嫌いな植物ですが、奈良公園には食べてしまうシカがいるそうです。困ったものです」

シカ柵で囲ったところと、囲っていないところを対比した試験地がありました。フェンス内は青々と下草が生い茂っていますが、両サイドのフェンス外は、ところどころ地表が露出しています。シカ食害のひどさが一目瞭然。参加者から「いいサンプルだなあ！」と感嘆の声がもれました。「シカが入らないとこのように植生が回復します。フェンス内は、木本植物が二十数種、草本類が三十種くらい出ていますが、フェンスを外したら瞬く間に両サイドのように食いつくされてしまうでしょう」と菅原先生。

植生が豊かなら分解者の微生物層も豊かなのでフカフカな土が形成されます。一方でシカに食べられ植生が貧弱だと、せっかくできた良質の土もどんどん流されてしまいます。水源涵養林にとってシカ食害がいかんに深刻か、よくわかりました。



食害防止柵を施した部分(手前)は周囲に比べて下草が明らかに繁茂している(写真提供:菅原泉さん)

### ■森林と私たちの暮らしはつながっている

水を育む森林の環境機能は、雨水のゆくえがカギになります。雨が降るとA層、つまりフカフカの表層土から浅い地中、深い地中へと浸透し、最終的に河川へと流れ込みます。A層は隙間が多いので雨を速やかに浸透しますし、B層およびその下層の土壌は細かい隙間が多いため保水力に優れています。森林の土壌には、このように移動速度の異なる水が存在するので、長い期間にわたって徐々に水を流出することができます。降雨がないときでも溪流の水が途切れることなく流れているのはそのためです。つまり、土壌は森林の水源涵養機能に大きな役割を果たしているのです。

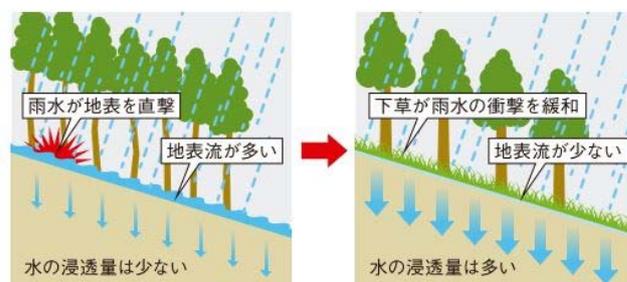
地中への浸透率がが増えてくると、渇水期でも河川の流量は増えます。間伐が適正に行われ、地中への浸透量が多く、地表流が少なければ、大雨でも河川への直

接流出は減るのです。間伐しない森は裸地化しているので雨水の衝撃を受けやすく、しかも表土がフカフカではなく固くなっているため地表流が多くなります。対して間伐した森では、隙間があいて下草があるので、降水の衝撃を受けにくい。地表流が少なく、浸透流が多くなって、いつも安定的な深層水が豊富です。

つまり、長雨が続き、かんかん照りが続くのが、比較的一定量の水に保たれているのが良い森林ということになります。そういう森林では土砂災害や洪水が起きにくく、恵みの水を育んでくれるわけです。

40m四方に林を抜き伐りし、これからミズナラを中心に植えていく試験地がありました。少しずつ新たに苗木を植えつけ、年齢や樹種の異なる樹木で構成される「複層林」を育成することで、多様な生物が暮らしやすく、水を育みやすい健全な森林ができあがります。ところが、それには200年もかかるそうです。

昔は燃料や材木にするため木を伐りすぎて森が荒れました。いまは放ったらかしのままになっているので森が荒れています。遠くから森の緑を眺めているだけでは他人事ですが、汗を流し、息を切らして森に入り、水を育むその働きを知ると、森を守ることが私たちの暮らしと地続きであるかがよくわかります。私たちはもっと森を身近に感じるべきなのかもしれません。



間伐しないと下草が生えず地表がむき出しのため、雨が降ると表土が流出しやすくなる

間伐している健全な森ならば下草が生えているので雨の衝撃を受け止めて、表土の流出を抑える。また、木々の間隔が広いので土壌にしみ込む水の量も増える

### 降水時の森林における水の浸透量

「間伐のしおり—平成25年度版—」(一般社団法人全国林業改良普及協会 編集・発行)を参考に作成

<さらに詳しい情報はこちら>

ミツカン水の文化センター(<http://www.mizu.gr.jp/>)

第12回里川文化塾「演習林で学ぶ〈森と水〉」実施報告  
[http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/houkoku/012\\_20130511\\_ensyurin.html](http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/houkoku/012_20130511_ensyurin.html)



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 16 ～四国地方～

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

♪我は海の子白浪の さわぐいそべの松原に  
煙たなびくとまやこそ 我がなつかしき住家なれ

(文部省唱歌 (6年)『我は海の子』 作詞作曲：不明)

表1 四国地方『川と人』めぐり訪問先

日付	曜日	午前	午後	訪問先
7月2日	火		東京発	
7月3日	水	高松入り	土器川	香川県庁 土器川オアシス会 香川河川国道事務所
7月4日	木	吉野川	吉野川	まんのう池 香川用水記念公園 早明浦ダム 池田ダム 徳島河川国道事務所
7月5日	金	吉野川	那賀川	NPO法人新町川を守る会 徳島県庁 吉野川交流推進会議 那賀川河川事務所 阿南市社会福祉協議会
7月6日	土	物部川	物部川	物部川21世紀森と水を守る会 アクアリブルネットワーク
7月7日	日	仁淀川	仁淀川	大渡ダム NPO法人仁淀川お宝探偵団
7月8日	月	四万十川	四万十川	中村河川国道事務所 四万十川自然再生協議会 四国河川文化ネットワーク NPO法人RIVER 高知河川国道事務所 高知県庁
7月9日	火	肱川	肱川	大洲河川国道事務所 肱川流域会議「水中めがね」
7月10日	水	重信川	重信川 高松	愛媛県庁 松山河川国道事務所 重信川の自然をはぐくむ会 水をきれいにする会 重信川美化推進の会 四国地方整備局
7月11日	木	東京着		

### 1. 四国8河川巡礼の旅へ

2013年7月3日(水)から10日(水)にかけて四国地方の川で活動する市民団体の調査に出かけた。昨年の九州地方、中国地方の調査に続き、3つ目の地方である。訪問するのは1級水系で、九州地方20水系、中国地方13水系、四国地方8水系を合わせると109水系中41水系周ることになる。まだまだ109



図1 天の川に願いをこめる

水系制覇には遠いが徐々に目標達成に近づいている。

寝台特急のサンライズ瀬戸号に乗り、四国へ向かった。今回の調査には後輩のA君とK君に同行してもらった。研究室内で一番体力があるA君、歩く時刻表と呼ばれる豊富な交通知識のK君とバランスのとれたパーティーだ。

行程は高松入りをし、土器川⇒吉野川⇒那賀川⇒物部川⇒仁淀川⇒四万十川⇒肱川⇒重信川と四国を一周し、再び高松に戻ってくる行程だ(表1)。

瀬戸大橋を渡ると四国が見えてきた。いよいよ四国8河川巡礼の旅がはじまるという期待感を胸に四国へ降り立った。

7月7日の七夕が近いこともあり、あちこちで七夕飾りがみられた。道中、短冊に願い事をした(図1)。笹の葉に短冊を吊るし、天の川に願った。



図2 土器川流域にそびえる讃岐富士



図3 早明浦ダムのダム湖（貯水率 100%）

## 2. 日本一小さな一級河川（土器川）

香川県庁/土器川オアシス会/香川河川国道事務所

香川県庁の河川課を訪ね、市民団体に関する情報を情報収集。香川県は『リフレッシュ「香の川」パートナーシップ』というアドプト制度を展開していて、香川県内の各河川において盛んにアドプト制度が展開されていて、対象河川の土器川流域の団体に関しても情報収集できた。

その後、高松から土器川流域のある丸亀市に移動。電車の車窓から土器川の河口が見えたが今までみただの一級水系の河口よりも小さく、流量も少なかった。知ってのとおり、土器川流域は109水系の中でも流域面積140km<sup>2</sup>と小さい流域の一つである。小さい流域の讃岐平野にぽこりとそびえる讃岐富士がよく映える（図2）。土器川の風景を見ながら到着したのは土器川オアシス会の事務所。名前が涼しげでちょっと試してみたいくなる。この土器川オアシス会は地元の建設会社の人達が地域貢献の一環で市民団体をつくり、活動している。川のゴミ拾いを定期的におこなっているほか、川祭りなどの行事もしているそうだ。土器川オアシス会の羽野健次さんのお話によると、この流域は市民団体自体はそんなに多くないが、地域の自治活動がしっかりしているので、みんな自分の近くの土器川の区間は自分の庭のように日常的によくみていて、常にきれいな状態に保たれているようだ。

羽野さんに土器川を少し案内していただいたが、中流域の川幅に驚いた。ひょいとジャンプして飛び越えられるくらいの箇所もあり、川の中を渡って行き来できそうだ。こんな一級河川は初めてだった。いい意味でコンパクトな流域なため、自分の庭のように感じやすいかもしれない。

## 3. 香川の水事情と吉野川（吉野川）

早明浦ダム/池田ダム/徳島河川国道事務所

2日目、吉野川に入る前に少しだけまんのう池と香川用水を見学。弘法大師が改修したといわれるダムだ。見学していると、池のほりにある喫茶店のおばちゃんが、「あなたたちどこからきたん？ちょっとお茶いれてやるけん、のんでいきいな。」とお声かけいただいた。これは弘法大師さまが歓迎してくれているに違いないと何か直観的なものを感じ、お言葉に甘えてお茶とお菓子をいただき一息ついた。話を聞いていると今年は雨がも多く、まんのう池もいっぱいまで渇水になる心配は少ないそうだ。

おばちゃんにお礼を言って、香川用水記念公園を少しだけ見学。香川用水は吉野川水系から引いてきていて、香川の渇水を解消するためにも重要な水源となっている。

吉野川上流域の早明浦ダムに到着。渇水になるとよくニュースなどで出てくるダムだ。堤高106m、堤頂長400m、総貯水量3億1600万m<sup>3</sup>と大きな多目的ダム（F,N,A,W,I,P）だ。早明浦ダムの堤体まであがってみると、クレストゲート付近まで水が溜まっており、7月4日現在の跳水率は100%だそうだ（図3）。とりあえず、渇水の心配はなさそうだ。

その後、下流に向かって吉野川沿いを走る。大歩危、小歩危付近の川はさすがは四国三郎という暴れ川の異名をもつだけのことはあり、激しくしぶきをあげて流れている。

その後、池田ダムを見学。堤高が24mと形式は堰のようなかたちに近いが立派なダムでここから香川用水を送っている。

その後第十堰、徳島河川国道事務所までヒアリングと盛りだくさんの行程を経て、2日目の吉野川下りを終了（字数の関係で省略）。



図4 新町川をクルージング



図5 川側に玄関を構える建物

#### 4. 川づくりはまちづくり（吉野川）

##### NPO 法人新町川を守る会/吉野川交流推進会議

3 日目、吉野川下流域の新町川を見学。新町川は河口三角州の一つの川で、周辺は流路で張り巡らされており、舟運で発達してきた。この川を利用して川まちづくりを進めているのが「NPO 法人新町川を守る会」だ。当日は副理事長の新居さんに船を操縦していただきながら、説明を聞いた（図4）。新町川のクルーズコースは25分で、200円の保険代だけで乗船できる。年間の利用者数は55万人にも上る。川の汚い状況に憂い、まずは市民に川の状況をみてもらおうとはじめた。また、船で周遊してはゴミを集めるといった地道な努力を行ってきた。そんな効果もあってか、活動当初は川に背を向けていた建物が川の方を向いて入口を設けるようになっていったという（図5）。また、川沿い周辺にはパラソルカフェもあり、川とまちの距離が非常に近い。イベントも会員のアイデアで、楽しいものが数多くある。特



図6 那賀川下流部の那賀川鉄橋

興味深い。「できるときにできる人ができること」というスローガンのもと、無理なく楽しくやっているのが活動を行っていく上で重要と新居さんは言う。

午後からは吉野川流域のネットワークを形成する『吉野川交流推進会議』に伺った。徳島県が事務局をしていて、吉野川流域のつながりをつくっている。さらには暴れ川交流として、利根川、筑後川、吉野川で交流を行っており、流域の内外の交流が非常に円滑に行われている。

斬新な企画力、迅速な行動力、豊富な人脈をもつ以上2つの団体は間違いなく、日本の市民団体のモデルケースの一つである。川づくりはまちづくりに繋がっていることを感じられる事例だった。

#### 5. 協議会がかたちをかえて（那賀川）

##### 那賀川河川事務所/阿南市社会福祉協議会

3 日目、那賀川河川事務所へ。那賀川の市民団体は少ないが、その一つに『那賀川アフターフォーラム』というものがある。もともと那賀川河川事務所が河川整備計画を策定する際に設置した『ゆきかう那賀川推進会議』が、上下流交流を進めてきた。ダム見学、流域写真展、那賀川源流コンサートなどを行い、流域が一体となって活動できる機会をつくった。本来は河川整備計画策定までの協議会形式の会に過ぎなかったが、参加者の中から今後も継続していこうという声上がり、アフターフォーラムとして独立した活動を行う市民団体へと発達したそうだ。

那賀川鉄橋付近の那賀川で写真を撮り、時間の都合上、那賀川を後にした（図6）。



図7 荒廃する物部川上流域の山の斜面

## 6. 山の荒廃は川の荒廃（物部川）

物部川 21 世紀森と水を守る会/アクアリプルネットワーク/山嶺の森をまもるみんなの会/

3 日目夜からの 2 泊 3 日、高知県物部川流域に滞在。高知県香美市の川仲間の通称岩太郎君の実家にお世話になる。彼は 21 歳の最年少漁協組合員で仕事する傍ら川を愛する川漁師だ。投網や友釣りも非常にうまい。夕食でもとってきた新鮮な魚や高知県の特産品をたくさんごちそうになった。

4 日目午前中は物部川の市民団体をめぐった。物部川には今回一緒に活動を行っている 3 団体の方にお話しをお聞きすることができた。いずれの方も懸念として挙げたのが物部川上流域の山の荒廃である。近年シカの増加による下草の食害が進行しており、山の荒廃が進んでいる（図7）。これにより山の土砂が流出しやすくなっており、雨が降ると土砂が河川に流出し、川が濁水となる。これによりアユをはじめとする魚類の生育に大きく影響を与えると懸念されている。そんな山の異変は 2007 年より顕著になったと山嶺の森をまもるみんなの会の依光良三さん（高知大学名誉教授）はいう。最近では山に防塵柵を張ることで食害を食い止める効果もみられているが、防塵柵は広域的に張らなければならないので、費用と労力がかかる。山の荒廃防止対策の活動はもちろんのこと、川遊びや生物調査など体験活動や啓発活動も多く行なっている。水質は申し分ない物部川だが、川の濁度による河川環境への影響は興味深い点である。依光さんによると、四国の他の河川は雨が降ったあつと川の濁度が解消されるまでの期間が 2 日程度なのに対し、物部川は 20 日もかかっているとので、『山の荒廃は川の荒廃』というのは物部川の抱える課題であることが垣間見えた。



図8 物部川の一斉清掃開始前



図9 水を得た川系男子

## 7. 川系男子の川の日の過ごし方（物部川）

一斉清掃/大渡ダム/NPO 法人仁淀川お宝探偵団

4 日目の 7 月 7 日は川の日。天の川にちなんで制定されている。この日は四国の一級河川のあちこちで一斉清掃が行なわれるため、我々も物部川への御奉公。朝 7 時に行ってみるとすでに 30 人以上の人が集まっていた（図8）。ゴミ拾いがスタートするとみんな一斉に散らばり、堤防や水際などでゴミを探す。しかし堤防沿いを歩けど歩けどゴミが落ちていない。最終的に 30 人で集めたゴミの量はゴミ袋 3 袋ほど。たばこの吸い殻、釣り針などはほとんど落ちていない。これは物部川の利活用する人のマナーの高さの現れだろう。

清掃後、物部川を後にし、仁淀川に向かった。仁淀川といえば「仁淀ブルー」といわれるほどの清流である。仁淀川の吸いこまれるような美しさに酔いしれ、思わず、川の中へ。水は冷たいが、水の中には美しい世界が広がっていた。水を得た魚のように泳ぎまわり（図9）、透き通った冷たい水の中に野菜を冷やして食べた。夜は満点の星空が天の川をくっきりとつくりだしていた。川系男子が理想とする川の日日和の過ごし方だった。

## 8. 仁淀ブルーの日常(仁淀川)

大渡ダム/NPO 法人仁淀川お宝探偵団



図10 七夕飾りを川に流す習慣

川の日らしいことをして川を楽しんだ後、仁淀川上流へ向かった。上流域に行くと、沈下橋がみえる。沈下橋の上を走る軽トラが仁淀ブルーの美しさに日常感を与えている。

沈下橋を遠くから眺めていると、おばあちゃんと孫が七夕飾りを抱えて橋の上にやってきた(図10)。何をするんだろうとみていると、なんと、橋から七夕飾りを投げた。どんどん流れていく笹の葉を孫がじっと見ていた。

慌てて駆け寄り、おばあちゃんにこれはなんなのか聞いてみた。このあたりでは7月7日に七夕飾りを川に流す習慣があるらしい。美しい清流には美しい川文化がある。天の川も遠くて近い川だと感じた。

さらに上流にあがり、大渡ダムへ。大渡ダムは総貯水容量約6,600万 $m^3$ 、堤高96m、堤頂長325mの多目的ダム(F,N,W,P)である。展望台からダムを見下ろすと堤体とダム湖が一体となってよくみえる。

大渡ダムで引き返し、下流へ下り、高知市内へ戻る。NPO 法人仁淀川お宝探偵団の生野さんにお会いした。仁淀川お宝探偵団は大きな行事として、『国際水切り大会』を主催している。自分のオリジナルストーンを河原で拾い、水切りの回数競争を競う。子どもがなんとなく日常的にするような遊びを真剣に競い合うところにユーモアさがある。生野さん曰く、「仁淀川が日常的に美しいということは何となくすごいことであって、当たり前のことではないということを知ってほしい。この美しさは奇跡的なことなんだと。」そういう日常的なものの中から美しさを探し出したいという意味を込めてつけられた名前は仁淀川お宝探偵団。

## 9. ラストリバーの風格(四万十川)

中村河川国道事務所/四万十川自然再生協議会/四万十川流域住民ネットワーク/四国河川文化ネットワーク・NPO 法人 RIVER/高知河川国道事務所/高知県庁



図11 日本最後の清流と呼ばれる風格

5日目、高知県四万十市(中村)からスタート。中村は四万十川の下流域で、川幅も大きい。

この日は中村河川国道事務所を訪問し、四万十川自然再生協議会、四万十川流域住民ネットワークの方にお話しをお聞きした。四万十川流域自然再生協議会は2003年に流域の自然再生事業を開始し、協議会が設置された。協議会から活動が発展していき、四万十川流域で様々な市民活動を展開するようになった。四万十川の自然再生事業の主な柱は『アユの瀬づくり』、『アカメの淵づくり』、『ツルの里づくり』などがある。一つ面白かったのが、自然再生事業の『アユの瀬づくりの副産物ができたこと。河道内樹木を伐採し散在させた際に自然に菜の花が入ってきて、河川敷一帯が樹木をとり囲むように咲く菜の花畑になり、観光資源となっている。

次にお話しを伺った四万十川流域住民ネットワーク。流域のネットワークをつくり活動を始める。もともと四万十川はじめ、四国地方の河川は上下流交流等が少なかったため、連携事例が他地方に比べ少ないという。他地域に頻繁に行き来できない地形的な要因も大きいようだ。

また上流の十川の方まで四万十川を登る四万十川と沈下橋の風景はさすが『日本最後の清流』と呼ばれることはある(図11)。

NPO 法人 RIVER を訪問した。20代の若いスタッフで運営されていた。大抵は市民活動には60代中心が多いが、ここでは、四万十川の魅力に酔いしれ移り住んだ若い人が多く活動している。

## 10. 住民の川への関心はまず治水（肱川）

大洲河川国道事務所/肱川流域会議「水中めがね」/  
柳沢げんじぼたる保存会



図12 肱川と富士山（とみすやま）

6日目、肱川の大洲を訪問。大洲河川事務所で大洲河川流域会議「水中めがね」の方に肱川の市民活動についてお話を伺った。

水中めがねはネット会員230名、本会員140名の組織で、1991年に結成された。行政と民間が連携して活動を行っている。この会は流域会議という名前でありながら団体会員を募る流域ネットワーク型の組織ではなく、あくまで個人会員を募る形態の会である。通常だと事務局が行政となっている会の場合、行政名で会員やオブザーバーとなっていることが多いが、事務局員もそれぞれが個人会員である形式をとっているという。行政と民間が連携した事例として、2005年水位の変動情報を行政から会が取得し、メールマガジンで会員への情報発信を開始した。行政が情報発信を行った場合、誤報が出た場合、情報の信頼性の問題等があるが、市民団体があくまで一つの情報として発信することですばやく情報を共有することができる。

また肱川流域の住民が感心高いのは川の環境よりも治水であるという。この流域は10年間で3回も洪水に見舞われるという多発地帯である。肱川を案内していただき、富士山<sup>とみすやま</sup>から眺めると（図12）、大洲付近は盆地になっていることがよく分かる。昔は遊水地的にあふれさせる堤内地が存在していたため、下流の狭窄部も守りやすかった。しかし現在は全ての堤内地を守るという治水方針となったため、水の逃げ場がなくなり、大水の時に溢れやすくなってしまった。事務所の人が数十cm単位で堤防を築堤する肱川の治水は綿密な計画で大変難しい。

## 11. 人の名前のついた川（重信川）

愛媛県庁/松山河川国道事務所/重信川をはぐくむ会/  
水をきれいにする会/重信川美化推進の会



図13 流量の少ない重信川

7日目最終日、重信川を訪問。重信川は江戸時代この川を治めた足立重信からきており、人の名前がついた一級河川はおそらくこの重信川だけだろう。

川を見たが、本川の流量が極めて少ない（図13）。伏流しているためか瀬切れ状態にある部分も多く見られた。また水質も悪く、四国の1級水系の中で最も水質と水量に課題を持っている川と言えるだろう。

愛媛県庁で流域の団体の情報を収集した後、松山河川国道事務所を訪問し、重信川の自然をはぐくむ会の活動について尋ねた。

重信川流域では重信川の自然をはぐくむ会が活動しており、松山河川国道事務所が事務局を務めている。約7団体が合同で活動しており、はぐくむ会が各団体のネットワーク的役割を果たしている。流域の都市化により、瀬切れの拡大、水質悪化、泉や霞堤の消失など自然環境の悪化が進行していることをきっかけにし、愛媛大学、NPO、行政の連携により、2003年に設立。

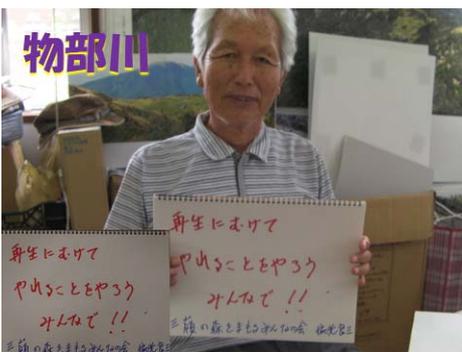
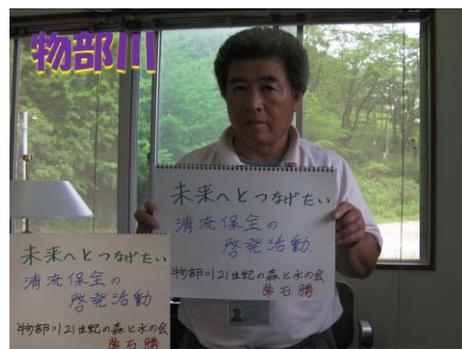
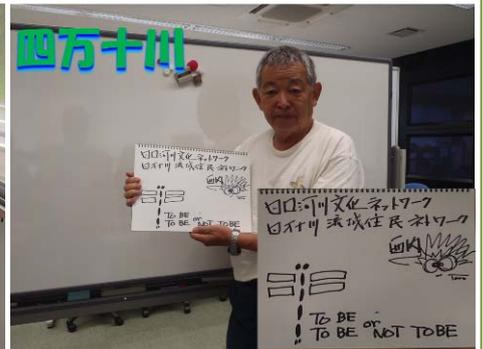
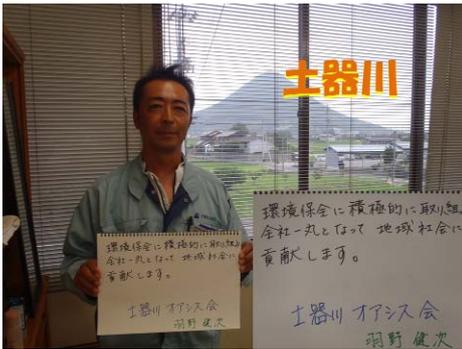
はぐくむ会の会員である、水をきれいにする会と重信川美化推進の会を訪ねた。水をきれいにする会はなんと28年も活動を続けている団体で、飲料水の安全性を考えることをきっかけに設立された。また、重信川美化推進の会は重信川流域の一斉清掃を行っており、流域を美化していく活動を行っている。

重信川の自然をはぐくむ会をはじめ、活動に活発な団体が多い。講演会、河川体験活動、モニタリング、清掃活動などを行っており、課題の多い川にはそれをどうにかしようと活発な市民団体が存在することが多いように思う。

## 12. 四国8河川巡礼を終えて

8河川全ての河川事務所と市民団体、4県全ての県庁を周りきり、四国を一周した。一周して高松に戻ってきて、最後の目的地として選んだ場所は四国地方整備局。今回の行程を計画するにあたり、各河川事務所との仲介を果たしていただいた。

8河川を1川1川めぐるとはまさに川のお遍路。四国を一周して自身がどれだけ成長したかは定かではないが、四国の川の美しさ、人の温かさに多く触れることができた。今回の旅も無事に終了。お忙しい中対応していただいた四国のみなさまに感謝申し上げる。また9日間旅の仲間として後輩が抜群のアシストを果たしてくれた。彼らがいなかったらここまで充実した調査はできなかつたろう。研究室の渥美元貴君、鴨志田穂高君に謝意を表したい。



- ・ 滞在日数: 7日間(夜行含んで9日間)
- ・ 四国内移動総距離: 約1000km
- ・ ダムカード獲得枚数: 3枚
- ・ 訪ねた河川事務所: 8機関(関連含め12機関)
- ・ 名刺交換した人: 43名
- ・ 旅をサポートしてくれた友人: 3名
- ・ 出会った行政の人: 39名
- ・ 出会った市民団体数: 14団体
- ・ 旅で出会った人: 200名以上

# 川系男子の 四国地方「川と人」めぐり

完



引用:国土交通省HPより



## 【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)



## 夏休みは川へ行こう！



1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川でおいしいものを食べることに。

## 水辺からのメッセージ No.51

岡村幸二 (JRRN 会員)

精気あふれる水辺：  
都市の中の水辺をみごとに再生し豊かな生態系が育まれている



撮影：2013年7月（静岡県・三島市源兵衛川）

### ◆制御された流れがつくる心地よさ

富士山の豊かな水源から生まれる湧水がつくる清冽な流れがみごとです。三島駅のすぐ近く、まちの中心を流れる源兵衛川には、いつも子供たちが楽しそうな声が聞こえます。

### ◆よみがえる“水の都三島”

昭和 50 年代まで都市排水で汚れきっていた川を、市民と行政の協力で魅力的な親水空間に再生させました。今では、サワガニ、ゲンジボタル、オニヤンマなど水生動物 30 種、ミシマバイカモ、ヤナギモなどの水生植物 239 種が確認できます。(NPO 法人・グランドワーク三島の HP 参照)

### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■機関誌「水の文化」新連載記事紹介—Go! Go! 109 水系**

本ニュースレターにおいて「川系男子の『川と人』めぐり」を毎月寄稿頂いている筑波大学大学院・坂本貴啓さん (JRRN 会員) が協力する、ミツカン水の文化センター機関誌「水の文化」での新連載企画のご紹介です。

ミツカン水の文化センター機関誌「水の文化」は、「人と水」、「人と人」のかかわりの中で生み出された知恵や地域固有の習慣に光を当てながら全国の素晴らしい水文化を紹介する冊子で、1999年の創刊以来、ミツカン水の文化センターより無償で発行されています。

第44号 (2013年6月発行) より、新連載企画「坂本クンと行く川巡り Go! Go! 109 水系」が始まり、川系男子・坂本貴啓さんの案内で「水の文化」編集部の方々が全国の109水系を巡り、川と人とのかかわりを探りながら、川の個性を再発見していくという魅力的な内容です。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1295.html>



**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■『水辺共生体験館サマーセミナー ～人・川・生き物のつながりを考える～』(2013年7月～8月)**

岐阜県各務原市の「水辺共生体験館」で開催されるサマーセミナーのご案内を頂きました。

■日時: 7月31日(水)・8月1日(木)・6日(火)・8日(木)・22日(木)

■場所: 水辺共生体験館

■主催: 河川環境研究所、自然共生センター、岐阜大学、e-plus、岐阜県河川課、木曾川上流河川事務所

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1307.html>



**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■応用生態工学会札幌セミナー『本来の川を取り戻すために・・・その8』(8月26-27日)**

JRRN 団体会員の応用生態工学会より、応用生態工学会札幌セミナー『本来の川を取り戻すために・・・その8』のご案内を頂きました。

○日時: 8月26-27日  
○場所: 札幌市～帯広市  
○主催: 応用生態工学会札幌

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1332.html>



**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■『第6回淡水魚保全シンポジウム淀川大会～地域で守り、みんなで育む淡水魚～』(9月25日)**

「淡水魚保全研究会」及び「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」が主催する「第6回淡水魚保全シンポジウム淀川大会～地域で守り、みんなで育む淡水魚～」のご案内を頂きました。

○日時: 9月25日(水)

○場所: OITホール(大阪市)

○主催: 淡水魚保全研究会 他

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1329.html>



**【海外からの提供情報】**

**■「RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (Bulletin)」ご紹介**

RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (2013年7月号) を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、新たに創設された「流域パートナーシップ基金」の案内、英国環境庁のウナギ保全ガイドライン、また河川再生事例として湿地帯での葦の活用例などが紹介されています。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1326.html>



**(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)**

■地曳網体験 in 高麗川

○日時：2013年8月4日(日) 10:00-13:00  
 ○主催：NPO 法人荒川流域ネットワーク  
 ○場所：高麗川出世橋下流右岸(日高市高麗神社近く)  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1730.html>

■水の巡回展「ゲリラ豪雨展」 in 水辺共生体験館  
 ○日時：2013年8月9日(金)～8月30日(金)  
 ○主催：国交省中部地方整備局木曾川上流河川事務所  
 ○場所：水辺共生体験館(岐阜県各務原市川島笠田)  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1728.html>

■地曳網体験 in 都幾川  
 ○日時：2013年8月17日(日) 10:00-14:00  
 ○主催：NPO 法人荒川流域ネットワーク  
 ○場所：都幾川二瀬橋左岸(嵐山町蝶の里近く)  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1732.html>

■水シンポジウム 2013 in こうち  
 ○日時：2013年8月22日(木)～23日(金)  
 ○主催：第18回水シンポジウム2013実行委員会  
 ○場所：高知市文化プラザかるぼーと大ホール  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1715.html>

■応用生態工学会札幌セミナー『本来の川を取り戻すために・・・その8』(前頁参照)  
 ○日時：2013年8月26日(月)～27日(火)  
 ○主催：応用生態工学会札幌  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1736.html>

■第15回日本カメ会議  
 ○日時：2013年8月31日(土)～9月1日(日)  
 ○主催：日本カメ自然誌研究会  
 ○場所：名城大学(名古屋市中区塩釜口)  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1713.html>

■木津川カヌーの日

○日時：2013年9月8日、14日、15日、16日  
 ○主催：琵琶湖・淀川流域圏連携交流会  
 ○場所：木津川  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1701.html>

■応用生態工学会 第15回研究発表会  
 ○日時：2013年9月19日(木)～21日(土)  
 ○主催：応用生態工学会  
 ○場所：大阪府立大学なんばセンター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1662.html>

■公開シンポ「都市河川の自然再生と防災を考える」  
 ○日時：2013年9月21日(土)  
 ○主催：応用生態工学会  
 ○場所：大阪府立大学 I-site なんば  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1711.html>

■第6回淡水魚保全シンポジウム淀川大会～地域で守り、みんなで育む淡水魚～(前頁参照)  
 ○日時：2013年9月25日(水) 10:00～20:00  
 ○主催：イタセンネット、淡水魚保全研究会  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1734.html>

■第13回川に学ぶ体験活動全国大会 in 新潟見附  
 ○日時：2013年10月12日(土)～14(月祝)  
 ○主催：川に学ぶ体験活動協議会  
 ○場所：見附市アルカディア小ホール  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1685.html>

■第6回 いい川・いい川づくりワークショップ  
 ○日時：2013年11月2日(土)～11月3日(日)  
 ○主催：いい川・いい川づくり実行委員会  
 ○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1635.html>

**(海外の河川・流域再生に関する主なイベント) ※日本国内で開催される国際的シンポジウムも含まれます。**

- 2013.8.19-21(ソウル/韓国) 6th Conference of APHW (APHW2013)
- 2013.9.2-5(京都/日本) 2th International Symposium on River Sedimentation
- 2013.9.8-13(成都/中国) 35th IAHR World Congress
- 2013.9.11(ウィーン/オーストリア) RESTORE conference, European river prize
- 2013.9.11-13(ウィーン/オーストリア) 5th European River Restoration Conference
- 2013.9.16-22(ウッチ/ポーランド) Ecohydrology, Biotechnology & Engineering
- 2013.9.16-19(トゥールーズ/フランス) 26th World Canals Conference
- 2013.9.23-26(ブリスベン/豪州) 16th International Riversymposium
- 2013.11.12-14(仁川/韓国) Smart Water Grid International Conference 2013
- 2013.12.4-6(チェンナイ/インド) HYDRO 2013 International
- 2014.1.7-9(シンガポール) 7th Int. Symposium on Environmental Hydraulics ISEH
- 2014.2.24-27(パース/豪州) 35th Hydrology and Water Resources Symposium
- 2014.6.23-27(トロンハイム/ノルウェー) EcoHydraulics 2014
- 2014.9.21-26(リスボン/ポルトガル) IWA World Water Congress & Exhibition

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。  
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、  
所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご  
参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

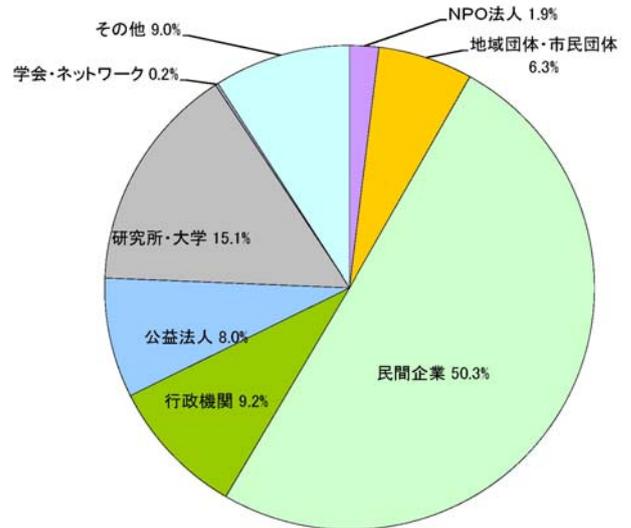
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を  
ご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2013年7月31日時点の個人会員構成  
(個人会員数：624名、団体会員数：51団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

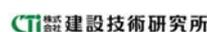


日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局  
公益財団法人リバーフロント研究所 内  
〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階  
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。



リバーフロント研究所



国土文化研究所